The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「腹」の比喩表現と認知モデル再考 : 「きも」,「はらわた」,「ふ」との接点
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 45-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「腹」の比喩表現と認知モデル再考
—「きも」,「はらわた」,「ふ」との接点—

後藤　秀貴

1　はじめに

「腹が黒い」,「胸が踊る」,「頭が上がらない」など，日本語には豊富な「からだことば」がある。このうち,「腹」は「胸」や「頭」と並んで精神作用に関わる比喩表現が多いことから，日本人の「心の座」として繰り返し論じられてきた（e.g., [Matsuki, 1995] ;［田中, 2003］;［松井, 2007］;［後藤, 2015］）[1]。「腹」は日本人にとって最も基本的なレベルの身体部位であると考えられ，その限りにおいて,「腹」という単位で分析を試みることは妥当といえる。しかしながら,「腹」という語の指示対象は多岐に渡り, (1) のように，からだ全体から相対的に定められる外的な部位を指すのみならず，内部に収められた臓器を指すことがある。

(1)「腹」: ① 胃・腸などの内臓をおさめている部分。また，胃や腸。おなか。② 物の中央のふくらんだ部分。③ 母の胎内。また，そこから生まれた子。④ ア）心。考え。イ）きもったま。度量。胆力。ウ）気持ち。　（『日本語大辞典（第二版）』，下線は筆者）

(2)｛腹／肝｝を据える,｛腹／腸｝が捩れる

問題となるのは，日本語では内臓を表す他の語にも心に関する意味が備わっており，さらに (2) のように,「肝」や「腸」と「腹」の間には明らかな互換性が見られることである。これは,「腹」に関する理解が内臓の理解と重なり合うことを示唆しているが，先行研究では，この点については十分に論じられることがなかった。本稿では,「腹」と内臓を表す 3 つの語「肝」,「腸」,「腑」の比喩表現を比較することで，①「腹」の認知モデルは「肝」,「腸」,「腑」の認知モデルと部分的に重なり合うことで成り立っていること，② その一方で，各々の内臓の認知モデルは,「腹」の認知モデルと対応しながらも独自の特徴を有しており，同様に「腹」に関しても，いずれの内臓にも見られない独自の特徴が存在することを指摘する[2]。そしてこれら ①, ② の指摘に基づき，身体に関する理解へのアプローチは，隣接関係あるいは包含関係にある身体部位・器官との比較を通じて，更なる精緻化が見込まれることを主張する。

論文の構成は次の通りである。まず 2 節で調査手順を示したのち，3 節と 4 節で「腹」と内臓に関するメトニミー表現・メタファー表現を観察する。5 節で調査結果のまとめ，考察を行ったのち，6 節では「からだことば」に関する他言語・他文化の影響の観点から今後の課題を提示し，その取り組みに関する現状報告を行う。

2　調査手順

『からだことば辞典』（東郷, 2003）では，心に関する意味を持つ内臓として「肺」,「肝」,「腸」,「腑」の 4 語が挙げられているが，本稿では,「きも」,「はらわた」,「腑」の 3 語を分析対象とする。「きも」,「はらわた」を敢えて仮名表記とした理由は，これらの語が必ずしも特定の内臓を表す訳ではないためである。解剖学的に言えば,「肝」は肝臓を,「腸」は小腸・大腸を指すが, (3), (4) に示すように,「きも」や「はらわた」は内臓一般を指して用いられることがある。同様に「腑」に関しても，その起源となる伝統的中国医学では六腑（小腸・胆・胃・大腸・膀胱・三焦）のことを表すが，日本語においては内臓を総称して用いられることが一般的と考えられる ((5))。日本語の慣用表現の中に組み込まれた「きも」,「はらわた」,「ふ」などの身体語彙が意味的にどのような扱いを受けるべきかについては，6 節で部分的に取り挙げるが，ここから 5 節にかけては，便宜上,「肝」,「腸」,「腑」と表記することとする。

---

[1] 本稿では，ヒトの感情・思考・判断・意志などの精神作用，およびそれを司るもとになる性格・気質・度量などの人格的特徴を広く指して「心」と呼ぶ。

[2]「（理想化）認知モデル ((Idealized) Cognitive Model)」とは，ある言語・社会集団が共有する制度・慣習・価値観等が理想化されたスキーマ的概念モデルとされ，認知意味論では，ことばの意味は世界についての理想化された知識体を基に理解されると考えられている (e.g., [Lakoff, 1987])。本研究では，あらゆる身体基盤・文化基盤の入力を経て形成される心に関する身体の理解の総体を指して,「認知モデル」と呼ぶ。

(3)「きも（肝）」: ① 肝臓。② 内臓。③ 肝っ玉。胆力。度胸。
(4)「はらわた（腸）」: ① 大腸と小腸の総称。② 内臓。③ 心。性根。
(5)「ふ（腑）」: はらわた。内臓。　　（『日本語大辞典（第二版）』，下線は筆者）

本研究で調査対象とするのは,『からだことば辞典』,『感情表現辞典』,『新選国語辞典（第八版）』,『大辞林（第三版）』,『日本語大辞典（第二版）』に記載された「腹」,「肝」,「腸」,「腑」のいずれかの語で構成される慣用句のうち，心に関わる意味を持つ表現である。概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: e.g., [Lakoff and Johnson, 1980]; [Lakoff, 1987]) の枠組みに基づき，各表現を想定される概念メトニミー・概念メタファーへと分類し，観察していく。

3　メトニミー表現

はじめに，身体感覚・運動との隣接性に基づくメトニミー表現を (6), (7) に示す。後藤 (2015) で論じたように,「腹」は「胸」と比べてメトニミーを基盤とする表現が限られており，いずれも「笑い（を誘発する感情）」に関するものである。(6) の「腹」表現のうち,「捩れる・捩る」,「縒れる・縒る」,「切る」は笑いに伴う腹筋の緊張・弛緩運動から得られる感覚を参照したもの,「抱える」は腹部に手を添える動作を参照したものである[3]。(7) に示すように，内臓で該当するのは「腸」の笑いに関する表現のみであり，結びつく語も「抱える」を除いて「腹」と共通している。

(6)「腹」: 腹（の皮）が｛捩れる／縒れる｝，腹（の皮）を｛捩る／縒る｝，腹を｛切る／抱える｝
(7)「腸」: 腸が｛捩れる／縒れる｝，腸を｛切る／捩る／縒る｝

4　メタファー表現

本節では，その背後に何らかの概念メタファーが想定される表現を観察していく。(8), (9) に示すように，日本語の＜腹＞[4]には大きく分けて 2 種類のメタファーが認められる (cf. Master Metaphor: [Kövecses, 2000])。

(8) 腹汚い，肝が大きい，腸が腐る，腑抜け
(9) 腹のうちを明かす，肝に銘じる，腸を探る，腑に落ちる

(8) は＜腹＞そのものが心に対応する例であり，(9) は容器としての＜腹＞に収められた心を含意した例である。本稿では，前者のメタファーを**＜心は腹である＞**，後者のメタファーを**＜心を収める容器は腹である＞**と呼ぶ。＜心は腹である＞メタファーに関しては，容器と内容物の隣接性に基づくメトニミー，すなわち＜心を収める容器は腹である＞メタファーからの拡張であるという見方もある（e.g.,［松井, 2007］）。しかし，これは身体と心を別個の対象として捉える西洋文化的な見方（心身二元論）を前提としており，後者のメタファーが日本語の基本となる＜腹＞の認知様式であるとは言い切れない（田中, 2003）。それどころか，日本文化に根付いた心身一如の観点に立つとすれば，心と身体を同一視する前者のメタファーが基本形であると考えることもできよう。こうした事情を踏まえ，本稿では，2 つのメタファーのうちの一方が，もう片方からの派生形であるという立場はとらず，両者を対等に扱っていく[5]。以後，＜心は腹である＞メタファーを 4.1 節で，＜心を収める容器は腹である＞メタファーを 4.2 節で観察していく。

---

[3] 厳密にいえば，前者は，笑いによって文字通り「腹が捩れた」状況を述べるものではなく，あくまで感覚を誇張的に表す表現である。更に「腹を抱える」に関しても，それが用いられた状況で実際に腹を抱えていなくとも意味が成立する（慣用化）。Goossens (1990) の言葉を借りれば，前者は「メトニミーを含むメタファー (Metonymy within Metaphor)」，後者は「メトニミーに基づくメタファー (Metaphor from Metonymy)」となり，メタファー表現として扱うことが可能であるが，本稿では 4 節で扱うメタファー表現との区別を明確にするために「メトニミー表現」と表記している。
[4] 以後,「腹」,「肝」,「腸」,「腑」をまとめて＜腹＞と表記する。
[5] 無論，2 つのメタファーが事実上の隣接関係にあることを否定するわけではない。

4.1　＜心は腹である＞

4.1.1　＜性格・性分が悪いことは腹が黒い・汚い・腐ることである＞

(10) 「腹」: 腹（が）黒い，腹（が）汚い，腹が悪い
(11) 「腸」: 腸が腐る

日本人にとって＜腹＞は個人の本質を映し出す部位であり，＜腹＞の性質はその人物の性格や性分と対応付けられる。＜腹＞は具象物として「黒い・汚い」もの（「腹」），あるいは「腐る」（「腸」）ものとして理解される。(12) のように，「黒い・汚い・腐る」は抽象的な事柄に対してネガティブな判断を下すという点で共通しており，この価値的類似性が (10)，(11) の表現に一貫性を持たせている（「評価性メタファー」: ［鍋島, 2011］）。

(12) 黒い噂，汚い方法，腐った政治

4.1.2　＜心の安定・不安定は腹の安定・不安定である＞

(13) 「腹」: 腹癒せ[6]，立腹，腹立ち（紛れ），腹立たしい，腹が｛癒える／居る／収まらない／据わる／立つ｝，腹を｛癒す／固める／括る／据える／立てる｝
(14) 「肝」: 肝が据わる（据わっている），肝を据える

上で取り挙げた性格・性分とは異なり，心の安定を保つ役割を担うのは「腹」と「肝」である。日本文化では，古くから腰腹を中心とする胴部分に身体感覚が置かれ，身体の安定を得るためには，まずは腰腹の身体感覚の鍛錬が必要とされてきた（「腰肚文化」: ［齋藤, 2000］）。さらに齋藤 (2000) によれば，心身一如の思想が根付いた日本文化のもとでは，この「腰腹の鍛錬」とはすなわち，身体と心の総合的な飛躍を見据えたものであった。我々日本人が腰腹を意識する機会は，現在では武道稽古などの場面に限られてしまったようにも思われるが，ことばには深く根付いているようである。

(13)，(14) のうち，＜腹＞が表す心の安定は，さらに 3 種類に分類される。一つは，「腹癒せ」，「腹が居る」などが表す怒りの鎮静であり，二つ目は，「腹を括る」，「｛腹／肝｝が据わる」，「｛腹／肝｝を据える」が表す物事に動じない心（覚悟・度胸）のことである。「据わる・据える」と「居る」は字義的には類似する行為を表すといえるが，ここで敢えて区別をするのは，比喩的意味としての焦点が異なっているからである。すなわち，「居る」は，あくまで「腹が立つ」ことで不安定になった心の状態が再び元に戻る段階を述べるのであるが，対する「据わる・据える」は，将来の出来事に対する「構え」を述べる。前者は怒りの発生から鎮静までのシナリオの中で意味付けられ，後者は驚きや恐怖といった心の動揺が生じる以前のシナリオ（刺激・反応）の中で意味付けられるのである。

＜腹＞に関わる第三の心の安定は，「腹を固める」が意味する「決意」である[7]。先ほどと同様に，「腹」の安定という意味では「据わる・据える」に似ているが，「固める」が表すのは，当事者の中で揺らぐ意志を一点に定めるということである。この違いは，実例の中でも確認される。

(15) ...ともかく連合艦隊司令部では一息ついたが，このまま敵が引き下がるとは信じがたい。なによりガダルカナル飛行場は敵に抑えられたままである。まずこれを奪回しなければならない。そのためには全海上兵力を投入する腹をかためた。この海戦は第一次ソロモン海戦と呼称することになった...　（BCCWJ: LBj9_00242，下線は筆者）
(16) ...横須賀に帰ることになりました。その途中，夜中にベトナム沖約百四十海里でアメリカ軍の潜水艦から魚雷攻撃を受け，艦は沈没しました。私はどうせ独り身ですから，肝を据えて死を覚悟していました...　（BCCWJ: OP43_00001，下線は筆者）

---

[6] 「腹を居させる」の意から。「腹が癒える」，「腹を癒す」も同様（『日本国語大辞典（第二版）』）。
[7] 「腹が決まる」との言い回しもある。

(15) で語られているのは，将来への具体的な計画・方針を決定することであり，それは行為者自らの意志によって実現されるものである。一方，(16) の「肝を据える」も将来への心持ちを述べているが，話者の力が及ばない不可避的な事態を受け入れる覚悟を表している。この意味で，＜腹＞は個人の意志決定を司る能動的な身体部位としても理解されているといえるだろう。

4.1.3 ＜悲しみ・苦しみ・驚きは腹の損傷である＞

(17) 「肝」: 肝が｛砕ける／潰れる｝，肝に応える，肝を｛打たれる／砕く／潰す｝
(18) 「腸」: 断腸（の思い），腸がちぎれる，腸を｛絞る／断つ｝

心の動揺は，＜腹＞の安定性に加えて「潰す・砕ける・ちぎれる」などが表す損傷とも関連づけられる。その役割を担うのは「肝」と「腸」の 2 語である。興味深いことに，「腹」は本稿で扱うメタファーのうち，唯一この種に該当する例がない。字義的な意味が損傷を表すという点においては，のちに取り上げる「腹を抉る」が類似している。しかし，「腹を抉る」が表すのは，他人の心の中を見通して追及することであり，「肝を潰す」などが意味する精神的動揺とは焦点が異なる。言い換えれば，「肝を潰す」などの表現が事態の被害性を焦点化するのに対し，「腹を抉る」で焦点化されるのは内容物（本音）を露わにするという目的の部分となる。

4.1.4 ＜怒り・恐怖は腹の熱である＞

(19) 「肝」: 肝を｛煎る／冷やす／焼く｝

「熱」を参照した感情表現は，体温変化という普遍的な身体経験に基づくメトニミーとして多くの言語で観察されている (Kövecses, 2000)。(19) は，こうしたメトニミー基盤が「肝」という特定部位での経験として精緻化されたメタファー表現であり，「煎る・焼く」には怒りが，「冷やす」には恐怖が対応付けられている[8]。なお，のちに取り挙げる「腸が煮えくり返る」等の表現は，怒りを容器の内容物が沸き立つ様子に喩えたものであるが，一方の「肝を｛煎る／焼く｝」は，内容物の沸騰ではなく，固体としての「肝」そのものの熱変化に喩えている。

4.1.5 ＜根性・気力は腹である＞

(20) 「腹」: 剛腹，腹が｛ある／大きい／無い／太い｝
(21) 「肝」: 肝（っ）玉，肝試し，｛生肝／度肝｝を抜く，肝が｛大きい／消える／小さい／太い｝，肝を｛失う／落とす／消す／出す／抜かれる｝
(22) 「腑」: 腑抜け，腑が抜ける

4.1.4 節までに扱ったメタファーでは，＜腹＞は一般的な心へと対応づけられ，＜腹＞の状態は心の状態に応じて変化しうるものとして理解されていた。対する (20)—(22) の表現では，＜腹＞は根性・気力と表されるような特定の心の一面を象徴する部位として描かれている。この理解様式により，＜腹＞のサイズは心の強さに対応づけられる（e.g.,「肝が大きい」）。

比喩的意味に目を向けてみると，「腹」と「肝」に関して異なる特徴が観察される。第一に，「腹」表現には 2 通りの解釈があり，一方では根性や気力を，もう一方では度量を表すことがある。後者の場合，「腹」は他人の言動を受け入れる容器として理解されることで，容積が「大きい」ことは寛大・広量であることを，反対に「無い」ことは狭量であることを意味する。一方，「肝」表現

[8] 例えば，笑いが生じると，実際に腹部の局所的な筋収縮・弛緩運動が経験される。その意味で，「腹が捩れる」などの表現は純粋なメトニミー基盤を有しており，結果的に多くの言語で類似表現を生み出す (e.g., *split one's sides with laughter*)。他方，感情に伴う体温の変化は，本来は身体の広範囲で生じる生理現象であり，事実，英語などの怒り表現では腹部の熱変化は言及されない。本稿では，日本語のように怒りが「肝」の経験として理解されるには，「肝」と感情を結びつけるメタファー的な認知操作が必要であるという想定のもと，(19) をメタファー表現として扱う。

にはこうした意味の二重性は見られないが，その代わりに心の動揺を表す表現が含まれていることが独特である（e.g.,「度肝を抜く」,「肝を落とす」)。

4.2　＜心を収める容器は腹である＞

4.2.1　＜本音は腹の内容物である＞

ここからは，＜腹＞が心を収める容器として概念化された表現を観察していく。先行研究でも度々論じられているように，日本語の「胸」や「腹」には偽りのない気持ちとしての本心が宿る（e.g., [Matsuki, 1995] ; [田中, 2003])。更に (23), (24) に示すように，日本語では「胸」と「腹」に収まる本心を区別する傾向にあり，このうち，表向きの「建前」と対をなす「本音」は身体（胴部）の最下部に位置する「腹」へと収められる。

(23) …ウェディングドレス姿の新婚組があちらこちらにいる。式を挙げるとこの広場に来るのが慣例なのだという。それにしても薄いドレスにコートをひっかけたままである。満面の笑みの中に幸せがこぼれ落ちそうだ。愛する人の腕につかまり，友人達が周りを取り囲んでいる。私達はカメラを示して，ちゃっかりその友人の輪の中に入り写真に納まった。きっと幸せになってね，と胸の中で囁いていた…（BCCWJ: PB37_00117，下線は筆者）

(24) …知盛は水軍を率いて一行の御守護の役につき得意であった。雅子も夫と共に随行した。このとき，後白河は清盛の手厚い奉仕を機嫌良く受けるふりをしながら，腹の中ではあれこれ目論んでいたのである。〈清盛めは蔓延り過ぎた。刈り取らねばなるまい...
（BCCWJ:PB52_00091，下線は筆者）

慣用句としての本音の表現を見てみよう。(25), (26) において注目されているのは，本音の「探索」という一面である。通常，本音は「腹」に収められているが（「腹に一物」)，他者が「抉る・探る・読む」ことにより，それが露わになる（「見る・見抜く・見え透く」)。また，当人から本音を打ち明けることが必要な場合には，容器としての「腹を割る」ことになるのである。各語の分布について述べておくと，該当するのは「腹」と「腸」のみであり，4.1 節で多くのメタファー表現が観察された「肝」に関しては表現が見当たらないことに注目されたい。

(25) 「腹」: 腹に一物，腹を｛抉る／探る／見抜く／見られる／読む／割る｝
(26) 「腸」: 腸が見え透く，腸を探る

4.2.2　＜怒り・不満は腹の内容物である＞

(27) 「腹」: 腹膨るる業，腹が｛煮える／膨れる／張る｝，腹に｛収める，据えかねる｝，腹の虫が｛収まる，収まらない｝
(28) 「腸」: 腸が｛煮える／煮えくり返る｝[9]

本音の表現が「探索」に焦点を置いたものであったのに対し，怒りや不満の感情表現は「強大化・抑圧」に関わる語を中心に構成されている。これは日本語において本音としての感情を隠蔽することに重点が置かれるためである (e.g., [Matsuki, 1995])。つまり，怒りや不満は他人に伝わらぬようできるだけ「腹」に収められるが，それが続くと「腹」は膨れ上がり，「腹」に据えかねる事態となるのである。

さて，(27), (28) の慣用表現を見てみると，怒りや不満を収める容器としての役割を担うのは「腹」と「腸」に限定されており，ここでもやはり「肝」に該当する表現がない。これは一見，4.1 節で「肝」に多くの感情表現が観察されたという結果と整合しないようにも思われる。しかし改めて確認しておきたいのは，「腹」と「肝」の各々によって表される感情の性質の違いである。(27) の怒りや不満は本音としての性質を帯びており，意味上の焦点が置かれるのは，他者との関

[9] 『日本国語大辞典（第二版)』に「激しい怒りをこらえることができない。憤怒に堪えられないさまにいう。」との説明があるように，「腸が煮えくり返る」の表現には，怒りとそれを抑え込む力の対立関係が含意されている。

わりから生まれるその隠蔽の段階である[10]。これに対し，先に観察した「肝」表現の多くでは，驚き・恐怖・悲しみ・苦しみなどの感情を主体が一方的にどう被るかが問題とされており，感情に対する主体の働きかけは含意されていない ((17)，(19))。言い換えれば，「肝」表現で注目されるのは感情の情動的な一面 (e.g., [Plamper, 2015]) となる。なお，怒り表現として「肝を｛煎る／焼く｝」が存在するものの，やはりそこには (27) で表されるような「本音と建前」の葛藤は含意されていない。「肝」が情動的な感情の一面を扱うのに対し，「腹」は本音の座としての認識が強く，感情が＜容器としての腹の内容物＞として理解される際も，そうした枠組みのもとで概念化が果たされるのだと考えられる。

では，なぜ怒りや不満といった感情は，「腹」という身体部位を介して本音と結びつくのだろうか。ここでは，4.2.1 節で挙げた (24) との比較からその要因について踏み込んで考えてみたい。(24) の「腹の中」では，主体（後白河）にとって考えを隠すという行為は，将来的に相手（清盛）を失脚させると同時に自らを有利な方向に導くという目的によって動機付けられている。この場合の本音とは，いわゆる「目論見」や「企て」と呼ばれるものであり，一見すると，怒りや不満とは何ら接点が無いようにも思われる。しかし，怒りや不満の隠蔽を動機付ける要因へと目を向けることで，両者の間に 1 つの共通性が浮かび上がる。すなわち，怒りや不満とは，驚き・恐怖・悲しみ・苦しみとは異なり，主として対人関係の中で生じ，他者へと向けられる感情であり，そこには常に自分以外の人間との衝突が伏在している。換言すれば，怒りや不満とは，主体がそれを明かすことで周りとの良好な関係を崩し，究極的には社会から淘汰されるなどの危険性を孕む感情である。この意味において，怒りや不満を内に留めておくという行為は，社会的な不利益を回避するための一種の防衛手段として位置付けられるだろう。従って，「腹」に収められる本音とは，単に企みの実現のような利益の獲得のみならず ((24))，それを伝えることで己の社会的立場が揺さぶられるのを防ぐという不利益の回避を見据えたものであり（怒り・不満），両者は極めて社会的かつ主体志向型の性質を共有している[11]。

4.2.3 ＜理解・記憶は腹に取り込む・刻みつけることである＞，＜感動は腹にしみることである＞

(29) 「腹」: 腹に落ちる
(30) 「肝」: 肝に｛しみる／銘じる（銘ずる）｝
(31) 「腸」: 腸にしみる
(32) 「腑」: 腑に落ちない

最後に取り上げるのは，容器としての＜腹＞に対象物が取り込まれる様子を描いた表現である。このうち，「腹に落ちる」や「肝に銘じる（銘ずる）」などの表現は，理解内容・記憶内容を「腹」や「腑」の中に落ちる物体もしくは刻印に喩えたもの，「｛肝／腸｝にしみる」は感動を「肝」や「腸」へと液体が浸透する様子に喩えたものである。「肝に銘じる（銘ずる）」は，今回得られた「肝」表現の中で唯一，知的な精神作用を表す例となる。

5 調査結果のまとめ

心に関する「腹」，「肝」，「腸」，「腑」の慣用表現の分布をまとめると，【表 1】のようになる。中央左の「ソース」の列は，概念メトニミー・メタファーにおける＜腹＞の起点概念を，中央右の「ターゲット」の列は目標概念を表している。また，起点概念が共通していても，目標概念の

---

[10] 日本語の「怒り」や「不満」が思考内容を伴う本音として解釈される傾向は，以下のように，発言を表す動詞との共起に関する容認度が相対的に高いことからも裏付けられる。
｛不満／?怒り／?苦しみ／??悲しみ／??驚き／??恐れ｝を｛述べる／言う｝。

[11] ここでの議論は，「腹」に収められる精神を「自己保存的」と特徴付ける田中 (2003) の分析と一致すると考えられる。
更に，こうした視点から (23) の用例を再び観察すると，「きっと幸せになってね」という思いには，もはや「腹」に収められる本音のような主体志向性（主体にとっての利益・不利益の意識）が欠落していることがわかる。

性質に何らかの異なりが観察されたものに関しては，それぞれに独立枠を設けた。

	ソース	腹	肝	腸	腑	ターゲット
メトニミー	感覚・運動	○	×	○	×	笑いを引き起こす感情
＜心は腹＞メタファー	汚・黒・腐敗	○	×	○	×	性格・性分
	安定・不安定	○	×	×	×	怒り
		○	○	×	×	覚悟・度胸
		○	×	×	×	決意
	損傷	×	○	○	×	悲しみ・苦しみ・驚き
	熱・寒[12]	(○)	○	(○)	×	怒り・恐怖
	サイズ	○	○	×	○	根性・気力
		×	○	×	×	驚き・恐怖
＜心を収める容器は腹＞メタファー		○	×	×	×	度量
	探索	○	×	○	×	本音
	強大化・抑圧	○	×	○	×	怒り・不満
	取込・銘記	○	○	○	○	理解・記憶
	浸透	×	○	○	×	感動

【表 1】＜腹＞の理解を支える概念メトニミー・概念メタファー

【表 1】から観察されるように，「腹」，「肝」，「腸」，「腑」のメタファー・メトニミー体系は，部分的に一致しながらも各々の傾向を示している。日本語において最も基本的な語と考えられる「腹」は，比喩的にも＜悲しみ・苦しみ・驚きは腹の損傷である＞と＜感動することは腹にしみることである＞のメタファーを除く全てに該当している。また，起点概念としては「腹」固有のものは存在せず，全て「肝」，「腸」，「腑」のいずれかとの互換性が見られる。内臓については，まず「腑」が最も該当数が少なく，全ての表現を合わせても「腑抜け」，「腑が抜ける」，「腑に落ちない」の 3 つが存在するに過ぎない。一方，「肝」と「腸」は 7 項目対 7 項目（8 項目）と同数の概念メトニミー・概念メタファーが観察されたが，興味深いのは，一部のメタファーにおいて両者の間に相補関係が見られることである。

4 節での観察から浮かび上がった「腹」の特徴は，本音の在り処としてどの内臓器官よりも際立った地位を占めていることである。また「腹」には，性格や度量などの人格に関わる一面から決意や理解に至るまで，幅広い心の側面との対応が見られる。一方で感情との結びつきは比較的弱く，「腹に据えかねる」などの怒り表現が豊富に見られるものの，その大部分が本音としての怒りと建前の葛藤を含意するものである。

内臓器官のうち，「腹」との重なりを最も伺わせるのは「腸」である。安定性やサイズに関するメタファーを除いては「腹」の項目全てに合致し，さらに表現を構成する語についても共通するものが多い（e.g.,「{腹／腸} を捩る」，「{腹／腸} を探る」，「{腹／腸} が煮える」）。その反面，「腹」には見られない感情との対応も見られる（e.g.,「断腸の思い」[13]）。一方，「腹」との対照性が比較的顕著なのが，「肝」である。「肝」は外部とのつながりに極めて敏感な臓器として理解されており，外からの刺激によって引き起こされた動揺や損傷を以て，悲しみ・苦しみ・恐怖・驚き・怒りといった感情を表現している。ただし，あくまで「肝」にとっての理想的な状態は「穏」の状態であり，反対に言えば，何事にも脅かされない心の健全を保つことこそが「肝」に課せられた役割となる。「肝を据える」や「肝が大きい」のように，「肝」の安定性やサイズが重要視されるのはそのためである。

さて，「腹」の認知モデルは「肝」，「腸」，「腑」の認知モデルと部分的に重なり合うことで成り立っていることが明らかになった。こうした結果は，まず単純に，「腹」という身体部位が臓器を

[12] ＜怒り・不満は腹の内容物である＞で扱った「{腹／腸} が煮える」にも熱が関与するため，「(○)」とした。
[13] ただし本表現に関しては，「世説新語」の故事を基にしており，『日本国語大辞典（第二版）』には，「中国，晋の武将，桓温が三峡を旅した時，従者が猿の子を捕えた。母猿は悲しんで岸を追うこと百余里，ついに船にとびうつることができたが，そのまま息絶えた。その腹をさいて見ると，腸がずたずたに断ち切れていた」とある。なお，中国語でも「断腸」や「肝腸寸断」といった表現がある。

内包するという事実に基づくであろう。しかし注意しておかなければならないのは，「腹」の理解が，それらの臓器の理解によって「構成」されているとまでは言えないということである。つまり，まず各々の臓器の認知モデルが前もって存在し，それらが統合することで初めて「腹」の認知モデルが成立したというわけではない。冒頭でも述べたように，やはり日本人にとっての最も基本的な身体部位は「腹」であり，「腹」と対応する概念メトニミー・概念メタファーの数もさることながら，結びつく語や表現形式の相対的な豊かさがそれを物語っている。また，例えば＜悲しみ・苦しみ・驚きは腹の損傷である＞のように，「肝」にはあって「腹」には無いメタファーが観察されるという事実を考慮すると，各々の身体部位・身体器官に備わった独自性にも十分に目を向けていく必要があると考えられる。従来，「腹・胸・頭」などの単位で行われてきた分析を，隣接・包含関係にあるより細かな身体部位との比較へと移していくことは，こうした「共通性の解明」，「独自性の解明」という二重の意味において，身体の理解に関するアプローチに意義をもたらすにちがいない。

6　「きも」の起源をめぐって

6.1　問題の所在

さて，これまでの議論を踏まえると，今後明らかにされるべきなのは，「腹」，「肝」，「腸」，「腑」という語がどのような歴史的経過のもとで関わり合い，反対に独自性を発展させ，維持してきたかということである。本課題については現在調査中であるが，残りの紙面を割いて，「肝」の起源に関する日中語比較の経過報告を行う。

6.2　日本語の「きも」

ある言語における「からだことば」の起源を明らかにするためには，身体の生理学的な経験のみならず，身体に関する文化的な知識・想定を十分に考慮する必要がある。このうち，内臓は普段見たり触れたりすることのできない身体器官であり，その理解には文化的なファクターが色濃く反映されると想定されている (e.g., [Sharifian *et al.*, 2008]; [Yu, 2003])。内臓に関する日本語の理解を辿る際に不可欠な要素となるのが，中国語やその背景にある文化の影響である[14]。議論のきっかけとして，本稿で敢えて触れてこなかった「きも」の特徴を 2 点挙げておこう。一つは，日本語の「きも」には「肝」と「胆」の 2 種類の表記が存在すること，もう一つは，日本語には「胆」を用いる慣用表現が少なからず残っているということである。

＜心の安定・不安定は腹の安定・不安定である＞
(33) 胆が据わる
＜驚き・恐怖は腹の熱である＞
(34) ｛肝胆／心胆｝を寒からしめる
＜根性・気力は腹である＞
(35) 剛胆（不敵），小胆，大胆（不敵），胆大（心小），胆力，落胆，胆を奪う

(34)—(35) の形式的な特徴から明らかなように，日本語の「胆」表現には，それが中国語由来であることを示唆するものが含まれる。また，(33)，(34)，(35) の形で区分したように，「胆」のメタファー表現は 4 節で扱った「肝」メタファーの特徴に合致する。こうした日本語の事実は，中国語やその背景にある文化との関わりを想定するための手がかりとなるであろう。

6.3　「肝・胆」を用いた日中表現比較

では，実際に中国語の「胆・肝」を用いた比喩表現は，日本語とどの程度類似するのであろうか。ここでは歴史的調査を行う代わりに，現代中国語との比較から検討し，日本語の「きも」の理解が中国語の「肝・胆」の理解と共通しながらも，完全に一致する訳ではないことを指摘する。

---

[14] 中国医学が遣唐使を介して日本に伝えられたのは 6〜7 世紀（三浦, 1996），漢語が伝えられたのはそれよりも前の 3〜4 世紀（山口, 2006）といわれている。なお，『日本国語大辞典（第二版）』によれば，以下の通り，すでに日本書紀で「きも」という音を「肝」に割り当てたとされる用例が確認される。
日本書紀 (720) 推古三六年三月（岩崎本訓）「汝（いまし）は肝（キモ）稚（わか）し」

6.3.1　中国医学における「肝」と「胆」の位置付け

はじめに，中国医学における「肝」と「胆」の位置付けを確認しておきたい。中国医学（東洋医学）において，ヒトの営みは，五臓（心・肝・脾・肺・腎）を中心とする働きと六腑（小腸・胆・胃・大腸・膀胱・三焦）の補佐的働きによって為されると考えられている。五臓六腑の働きは，単に身体的な作用のみならず，精神的な作用にも関わる包括的な概念として捉えられ，各々の臓と腑は，中国医学の根幹をなす陰陽五行説に基づき，一対の組としてまとめられる。このうち，「木」の性質を有する臓腑の組が「肝」（陽）と「胆」（陰）に当たる[15]（三浦, 1996）。こうした陰陽五行の見方は，現代中国語のメタファー体系にも深く根ざしていることが Ning Yu 氏の一連の研究で明らかにされている (e.g., [Yu, 1998; 2003; 2008])。

6.3.2　「肝・胆」を用いた中国語表現

Yu (2003) は，中国語の「胆・肝」表現を検討することで，その中心を「胆」に置いた 2 つの概念メタファー GALLBLADDER IS CONTAINER OF COURAGE / COURAGE IS *QI* [GASEOUS VITAL ENERGY] IN GALLBLADDER を提案している。

(36) [16] 胆子（胆−［接辞］）「勇気」，胆气（胆−気）「勇気」，胆力，胆量（胆−容積）「勇気」，
胆虚（胆−空っぽ）「びくびくした」，胆略（胆−策略）「勇気があって機転がきく」，
胆敢（胆−勇敢な）「勇敢な」，胆壮（胆−強い）「勇敢な」

(36) の通り，中国語の「胆」は「勇気 (courage)[17]」を象徴する部位として理解されている。だたし，Yu (2003) のメタファーの定式化が示すように，中国語の「胆」は容器として理解されているという点が日本語と異なる。これは，中国文化において万物の元素であり生命力でもあると解される「气 (*qi*) 」を念頭に置いた分析であり，「胆气」は内容物としての勇気を，「胆量」とはその「气」を収めるための「胆」の容積を指している。この理解様式に基づくことで，空の「胆」は勇気のないことを意味するようになる（「胆虚」）。

Yu (2003) は容器のメタファーを中国語の基本とすることで，本稿で＜根性・気力は腹である＞として扱った次の種類の表現についても，内容物（勇気）の量をメトニミー的に指す表現として分析している[18]。

(37)　小胆・胆小，大胆・胆大，落胆，喪胆（失う − 胆）「驚く」

---

[15]「木」とは，樹木に象徴される，しなやかで，よく伸びるような事物の性質を表し，「肝・胆」は，「木」のように血や気（血気）を十分に全身へとめぐらせる役割を担っている。また，精神的には，「肝・胆」は無意識的な自我や本能を司る「魂」を宿すとされ，ヒトの感情や性格，意志（適応判断）との関わりを持っている。そして，「肝・胆」が健全であれば，何事にも積極的で動じない姿勢が保たれ，反対に何らかの支障をきたせば，動じ易く，怒り（驚き）易い方向に傾くとされている。「肝」と「胆」との関係について述べておくと，「胆」は身体的な補佐として「肝」によって生成された胆汁を貯蓄・排出し，また精神的な補佐として「肝」によって示された方針の最終判断を下すと考えられている。いわば，心と身体の営みの中心となるのが臓としての「肝」であり，腑としての「胆」はそれを助ける役割を担う（三浦, 1996）。こうした捉え方は，本稿で論じた「肝・胆」表現の特徴にかなり一致すると考えられるが，陰陽五行説は，その考えが全て言語的に反映される訳ではないことが指摘されており (Yu, 1998; 2003)，またその複雑な歴史的背景から慎重な扱いを要するため，早計なコメントは避ける。

[16] 以後の例は，Yu (2003) で挙げられた表現の一部に，『精编成语词典（初版）』，『现代汉语词典（第五版）』，『講談社パックス中日・日中辞典（初版）』 から得られたものを補ったものである。

なお，難解なのは，「肝」を基本とする日本語とは異なり，中国語ではむしろ補佐的な立場であるはずの「胆」に比喩表現が集中していることで，例えば『现代汉语词典（第五版）』でも精神に関わる定義が記されているのは「胆」のみである。これは，日本語の「きも」と中国語の「肝・胆」を違える極めて重要な点であると考えられるが，現段階ではその要因について明らかにできていないため，今後の課題としたい。

[17] Yu (2003: 16) に “(...) I am using the word *courage* in a very loose sense to cover a broad spectrum of meanings also represented by such words as *boldness, bravery, daring, pluck,* and *spunk.*” とあるように，ここでの「勇気 (courage) 」は広い意味で用いられており，本稿で「心の安定」や「根性・気力」などと述べてきた概念に対応すると考えられる。

[18] 本稿では，Yu (2003) の分析に従うが，実際の表現を見る限り，中国語でも「胆・肝」と心（勇気）を直接結びつける概念メタファーの存在が認められるようにも思われる。具体的な検討については，今後の課題とする。

(38) a. 胆大包身（胆−大きい−包−体）「（体を覆うほど）勇敢な」
b. 胆小如鼠（胆−小さい−如く−鼠）「（鼠ほど）臆病な」
c. 胆大妄为（胆−大きい−無謀に−振る舞う）「したい放題に振る舞う」

その他の表現についても続けて観察していこう。

(39) 胆寒（肝−寒い）「怯えた」，肝火（肝−火）「癇癪，怒り」
(40) a. 吓破了胆（驚く−破れる・潰れる−［結果補語］−胆）「驚く・怯える」
b. 心胆俱裂（心−胆−全て−裂ける）「驚く・怯える」
c. 胆肝俱裂（胆−肝−全て−裂ける）「悲しむ・驚く」
d. 摧肝裂胆（壊す−肝−裂く−胆）「悲しむ」
(41) a. 肝颤（肝−震える）「怯える」
b. 胆惊心颤（胆−驚く−心−震える）「驚く・怯える」
c. 胆战心惊（胆−震える−心−驚く）「驚く・怯える」

(39) は「寒」や「火」が用いられていることから，4.1.4 節で論じた＜怒り・恐怖は腹の熱である＞に対応すると考えられる。日本語では,「煎る」や「焼く」を用いるところを，中国語では「火」に喩えている。怒りによる「气（肝气）」の暴走が，その循環を司る「肝」に熱を生じさせ，その結果炎上する（三浦, 1996: 128—129）という中国医学の考えが反映された表現である。(40)，(41) については，それぞれ 4.1.3 節の＜悲しみ・驚きは腹の損傷である＞メタファー，＜心の安定・不安定は腹の安定・不安定である＞メタファーに類似している。しかし，日本語と大きく異なる点として，中国語では「心」と「胆」,「肝」と「胆」といったように個々の臓腑が明確に意識されていることが指摘できよう。例えば,「胆」は「心」と結びつくことで ((40b), (41b, c)) 驚きのみならず，恐怖をも表す傾向が生まれる (Yu, 2003)[19]。

以下の表現についても同様の指摘ができるであろう。先ほど述べたように,「肝」と「胆」は「木」に属する臓腑を指すが，(42) ではこうした表裏一体の関係を喩えとして，真心・親しみ・本心，あるいはそのような間柄が表されている。しかし別の見方をすれば，これらは「肝」と「胆」があくまで独立した地位を保っているからこそ成り立つ表現である。こうした理解様式は,「肝胆相照（らす）」のように同一形式で現存するものを除いては，日本語の「きも」表現からは読み取ることができない。

(42) a. 肝胆（肝−胆）「真心，誠意」
b. 肝胆相照（肝−胆−お互い−照らす）「親しく心を通わせる」
c. 披肝沥胆（開く−肝−滴らせる−胆）「心をさらけ出す，真心をつくす」
d. 忠肝义胆（忠誠な−肝−正義の・高潔な−胆）「信頼・信仰・忠節心を持つ」

6.4 まとめ

まとめよう。本節では，日本語の「きも」メタファーを参考に中国語の「肝・胆」表現を概観した。日本語の「きも」には「肝」と「胆」の 2 種類の表記があり，後者にはそれが中国語由来であることを伺わせる表現が見られる。現代中国語の「肝・胆」表現には，本稿で論じた日本語メタファーと整合するものが多く，このことから，日本語の「きも」の理解が中国語・中国文化との関わりに影響を受けていることが想定される。しかし，日中語では一致しない部分も見受けられ，本節では中国語の「肝・胆」表現が「气」の考えを支えとする容器メタファーを基本形とすること，また，その背景にある中国医学あるいは陰陽五行の見方を強く反映しており，各々の臓腑を明確に意識した表現が見られることなどを示した。これらの点については，更なる調査が求められる。

さて，ここまでの議論を全て踏まえると，冒頭で敢えて「きも」と表記したことにも一つの意義が与えられるように思われる。すなわち，日本語における「きも」とは，中国語の「肝・胆」

[19] なお，(41b, c) に関しては，中国語母語話者からは「怯える」の解釈が強いとのコメントをいただいた。「震え」を表す「颤」と「战」が恐怖との結びつきを強めているものと考えられる。

の影響を受けつつも，日本語の「腹」あるいはその他の「からだことば」体系の中で地位を変容してきたはずの語である。言い換えれば，「きも」とは，日本という言語・文化的な一体系の中で培われた身体についての理解の一面を持ち，また他方で，他言語・他文化（本稿では中国語のみを視野に入れた）との関わりの中で育まれた身体についての理解の一面を持つ認知モデルに対応する。こうした特定の言語文化内・外の二方向からのファクターを視野に入れつつ，通時的・共時的な調査を綿密に進めていくことが今後の課題である。

7　結語

日本語の「腹」の理解をめぐる従来の研究では，その分析は「胸」や「頭」との比較のもとで行われ，内臓との関わりについては論じられることがなかった。そこで本研究では，「腹」と内臓を表す 3 つの語「肝」，「腸」，「腑」を用いた慣用表現を検討することで，①「腹」の認知モデルは「肝」，「腸」，「腑」の認知モデルと部分的に重なり合うことで成り立っていること，② その一方で，各々の内臓の認知モデルは「腹」の認知モデルと対応しながらも独自の特徴を有しており，同様に「腹」に関しても，いずれの内臓にも見られない独自の特徴が存在することを指摘した。結論として，従来，「腹・胸・頭」などの単位で行われてきた分析を，隣接・包含関係にあるより細かな身体部位との比較へと移していくことは，こうした「共通性の解明」，「独自性の解明」という二重の意味において，身体の理解に関するアプローチに意義をもたらしうることを述べた。

また，「きも」に関する理解の起源をめぐって，日中語比較分析の現状報告を行い，身体に関する理解には当該言語文化内・外の二方向からのアプローチが必要であるという方向性を示した。

謝辞

本稿を執筆するにあたり，有益なご助言・ご指摘を下さった大阪大学大学院言語文化研究科の渡辺秀樹教授，大学院生の陳栩さん，南澤佑樹さんに感謝いたします。勿論，本稿の不備や不足は全て筆者に帰するものです。

参考文献

Goossens, Louis (1990). “Metaphtonymy: The Interaction of Metaphor and Metonymy in Expressions for Linguistic Action.” In *Cognitive Linguistics* 1 (3), 323—340.

後藤秀貴 (2015). 「『腹』と『胸』を参照した日本語の比喩表現とその特徴—比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から—」. 『日本言語学会第 151 回大会予稿集』, 40—45.

Kövecses, Zoltán (2000). *Metaphor and Emotion: Language, Culture, and Body in Human Feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980 [2003]). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.（渡部昇一他［訳］1986. 『レトリックと人生』. 紀伊國屋書店.）

Lakoff, George (1987). *Woman, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作他［訳］1993.『認知意味論 —言語から見た人間の心—』. 紀伊國屋書店.）

松井真人 (2007). 「メタファーの経験的基盤に関する一考察 —『心』の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐって—」. 『山形県立米沢女子短期大学紀要論文』, 42 巻, 37—44.

Matsuki Keiko (1995). “Metaphors of Anger in Japanese.” In John R. Taylor and R. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*, 137—151. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

三浦於菟 (1996). 『東洋医学を知っていますか』. 新潮社.

鍋島弘治朗 (2011). 『日本語のメタファー』. くろしお出版.

中村明 (1993). 『感情表現辞典』. 東京堂出版. Plamper, Jan (2015). *The History of Emotions.* Oxford: Oxford University Press.

齋藤孝 (2000). 『身体感覚を取り戻す —腰・ハラ文化の再生—』. 日本放送出版協会. Sharifian, Farzad, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier (eds.) (2008). *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages.* Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

田中聰子 (2003). 「心としての身体 : 慣用表現から見た頭・腹・胸」. 『名古屋大学言語文化論集』, 24 巻 2 号, 111—124.

東郷吉男［編］(2003). 『からだことば辞典』. 東京堂出版.
山口仲美 (2006). 『日本語の歴史』. 岩波書店.
Yu, Ning (1998). *The Contemporary Theory of Metaphor: A Perspective from Chinese.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
Yu, Ning (2003). "Metaphor, Body, and Culture: The Chinese Understanding of *Gallbladder* and Courage." In *Metaphor and Symbol* 18 (1), 13—31.
Yu, Ning (2008). "The Chinese Heart as the Central Faculty of Cognition." In Sharifian, Farzad, René Dirven, Ning Yu, and Susanne Niemeier (eds.), *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages,* 131—168. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

＜辞典（日本語）＞
『大辞林（第三版）』 (2006). 三省堂.
『講談社パックス中日・日中辞典（初版）』 (2008). 講談社.
『新選国語辞典（第八版）』 (2001). 小学館.
『日本語大辞典（第二版）』 (1995). 講談社.
『日本国語大辞典（第二版）』 (2001) , 8 巻・10 巻 . 小学館.

＜词典（汉语）＞
『精编成语词典（初版）』(1993). 上海辞书出版社.
『现代汉语词典（第五版）』(2005). 商务印书馆.

＜コーパス＞
「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 」(https://chunagon.ninjal.ac.jp/search)